

Title	福澤諭吉のメセナ：文化財保護の先導性
Sub Title	Fukuzawa Yukichi's mécénat activity : his leadership in the protection of cultural property
Author	鈴木, 隆敏(Suzuki, Takatoshi)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009. ) ,p.74- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 2 : 図版削除
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0074</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 福澤諭吉のメセナ

## —文化財保護の先導性

鈴木 隆敏

「國光發於美術」——國の光は美術に発す、と福澤諭吉が書いた半切の書幅があった。國の力は文化や藝術に表れる、といった意味だろうか。制作年代は不明だが「國光」「美術」の上下二字とも大きく、墨量がたっぷり、字に勢いがある。福澤の3大事業の一つである「時事新報」紙上に掲載された文化財保護に関連した社説などから類推すると、50歳代の壮年期の書作ではないかと思われる。福澤は一生の間に1万通を超える手紙を毛筆で書いたと推測され、慶應義塾福澤研究センターにより現在2564通の書簡が確認されている。揮毫を頼まれることも多く、全紙、半切から色紙の類まで多くの書作を残している。時事新報社が太平洋戦争後、福澤の主な作品を集めた書幅集『福澤諭吉の遺風』を出版、この書(図1)が入っているが、実物は現在所在不明なので「あった」と過去形にした。ともあれ福澤自身が美術の愛好家であり、書画骨董などの趣味を持っていたのか——というところも「否」らしい。しかし海外に流出しそうだった美術品や骨董類をまとめ買いしたり、文化財の保護や古社寺、古美術の保存を慶應義塾の雑誌や時事新報の社説で訴えて、のちの文化財保護法制定に道を開いている。また歌舞伎役者と親交を深めて歌舞伎の脚本を書いたり、200首近い漢詩を詠み、家庭音楽会を開いたりしている。さらにいわゆる“福澤山脈”といわれる実業界で成功を収めた錚錚たる顔ぶれと、その人々が残した文化財や美術品の優れたコレクションを見ると、「國の光は美術に発す」の教えは山なみの裾野にまで広がっていることがわかる。文化財の保護や美術品の保存をはじめ、今日でいうメセナ(藝術文化への支援)活動に於いても、“多面体の巨人”といわれる福澤の果たした役割は大きいのである。

### 1. 「福澤先生は美術を見る目がない」

「初めから結論を言ってしまうと、福澤先生は美術を見る眼がなかった。美術に対しては木強漢(ぼっきょうかん★1)であったということである」

社団法人福澤論吉協会の機関誌『福澤手帖』53号(1987年6月刊)で、会員の故太田臨一郎は「福澤先生の美術観」という小論をこう書き出している。

また慶應義塾大学理工学部名誉教授で元慶應義塾高校校長だった故衛藤駿も、『福澤手帖』70号(1991年9月刊)の論文「福澤論吉の美術観——メセナへの先見性について」の冒頭で、福澤が慶應出身の天草・円教寺住職から「先生無学、観音と地藏の別を知らず」と揶揄されたエピソードを紹介している。なにやら福澤は美術、芸術については、多くを期待できそうもない感じである。

まず太田の「福澤先生の美術観」によると、太田は『福澤論吉全集』刊行の際、総索引の作製にあたったので「22巻を1字1行眼を通したのであったが、全巻を通じて(福澤先生が)美術に言及したのは4回しかない」と記している。改めて全集をチェックすると次の4箇所である。

1、全集第3巻『童蒙をしえ草』巻の2「画工の召使其の主人を助る事」

「ゼイムス・トルニルは英吉利(イギリス)に名高き画工なり。シントポールという大なる寺の円天井の壁に絵を画くとき」と、ロンドン・セントポール寺院で画家、Thornhillが天井に絵を画いているときにおきたエピソードを紹介している。画家が足場の上で制作中後ずさりして転落しそうになったが、機転を利かした召使が絵具皿を画に投げつけ、注意を喚起したので画家は助かった——というのである。文久2年(1862)5月14日にセントポール寺院を見たことは『西航手帖』にも記しているが、壁画の内容には興味がなかったのか全く触れてない。

2、同第17巻 明治11年9月16日付 小泉信吉、中上川彦次郎宛書簡

明治天皇が東北北陸御巡幸のさい、福澤が随行中の小泉信吉(後の慶應義塾長)、中上川彦次郎(同時事新報社長)にあてて同日付けで出した書簡。「先日銀座弓町を通り掛り、一向宗の仏壇を見て頻りにほしくなり、生涯の奢り大奮発、遂に之を買い宅へ引込み候処、其の美観譬へんに物なし。御帰府後御目に掛る物は是のみ」と、金びかの門徒の仏壇がいたく気に入った様子を書いている。太田によれば「これは全集中で物を美しいといった唯一の例」だという。

3、『福翁自伝』(全集第7巻)の「品行家風」の章に美術品をまとめ買いした話がある。

「明治14、5年のころ、月日は忘れたが、私が日本橋の知る人の家に行ってみるとその座敷に金屏風だの蒔絵だの花いけだのゴテゴテ一杯に並べてある。コリャ何だと聞いて見れば、アメリカの輸出する品だという。それから私がふとした出来心で(略)2の光200円~2300円で、何百品あるかろくに品も見ないで皆買って仕舞った」

当時の2200~2300円という金額は、いったい現代のお金にしてどのくらいだろうか。大ざっぱに1万倍で2千数百万円、5000倍でも1千万

円超。これをろくに品物を見ないで買ったのだから豪勢な話だ。『福翁自伝』の別の項では「(自分は) この通りな無芸無能、書画はさておき骨董も美術品も一切無頓着(中略)殺風景もちと念入りの殺風景」(無風流の由来)と美に関心のないことを告白している。

- 4、最後はアメリカに留学中の長男一太郎、次男捨次郎にあてた明治17年3月7日付けの手紙で、時事新報に絵を掲載することについて書いている。

「今泉秀さん(秀太郎)は今年4月に卒業の上は、新聞用の絵を勉強することに内話し致候。日本の大新聞と称するものに絵を入れざるは大欠典と存候に付、時事新報も是非共絵を挿むこと、西洋新聞同様にいたし度ものと話し合居り候」(全集第17巻)

今泉秀太郎は福澤の甥で米國に留学して西洋風のポンチ絵を学び、帰国後時事新報に入社して今泉一瓢の名で挿絵や政治戯評、社会風刺の漫画を描いたわが国漫画記者の第1号。カリカチュア(戯画)を「漫画」としたのは時事新報で、政治や社会風刺の漫画が今日「時事漫画」と一般的にいわれているが、もとは時事新報の漫画のことだった。とりわけ附録の日曜漫画は人気でページ数が多く「日曜の時事は漫画で重くなり」と川柳に詠まれるほどの売り物になった。しかしあくまで時事新報の編集紙面のアイデア、読者サービス用の附録であり、美術分野の問題ではない。

## 2. 古文化財の海外流出防止へ努力

このように福澤自身が美術、芸術分野に興味や関心があったとする記述は、あまり見当たらない。明治11年に古銅仏を買ったが、何かのはずみのようなのである。昨年秋刊行された『福澤手帖』138号で京都大学人文科学研究所長の金文京(きんぶんきょう)は、「仏像を買う——福澤の佛教感と文化財保護」と題し、次の漢詩の読み下しと解説をしている。

購銅製觀音佛長五尺於芝骨董店	銅製の觀音佛、長さ五尺なるを芝の骨董店で購う
蓋佛像既落 骨董之手	けだし仏像すでに骨董の手に落つれば
將近日附金工而鎔之者也	まさに近日に金工に附されてこれを鎔かす者なり
休道佛恩能濟人	道(い)うなかれ 仏恩はよく人を濟(すく)うと
人間濟佛亦前因	人間 仏を濟すくうも また前因ならん
光明赫奕金円徳	光明 赫奕たり 金円(古い円)の徳
贖得觀音墮落身	贖(あがな)い得たり 觀音墮落の身

(図2)

〈訳〉芝の骨董屋で長さ5尺(約1・5m)の銅製の観音像を買った。思うにこの仏像は骨董屋の手中に落ちた以上、近いうちに金属工に渡されて鋳かされる場所であったろう。仏の恩はよく人間を済度するなどと言うでない。この度は人間である私がこの仏を救ったが、これも前世の因縁であろう。ピカピカに輝くお金のおかげで、観音の落ちぶれた身を買うことができたのだ。

芝増上寺の門前、大門周辺にはいまでも骨董屋が何軒かある。かつては徳川家の菩提寺として栄えたが、明治維新と廃仏毀釈のせいで寺も町も衰退した。金は解説に続いてこの観音仏について「おそらく増上寺の寺僧の売り渡したものが近くの骨董屋に流れ、それを福澤が偶然購入したのであらう」と記している。

福澤が観音菩薩と地藏菩薩の区別がつかなかったことを、門下生の天草・円教寺の葦原雅亮住職が指摘した。葦原は福澤の書幅にわざわざ書き添えたという。これで「無学」と決め付けられるのは、いささか辛い感じがする。衛藤駿は「あたかも与謝野晶子が鎌倉の大仏を、阿弥陀ではなく釈迦牟尼と詠んだようなものだろう」として、福澤だけが美術に対する造詣がなかったわけではない—とカバーしている。そして大量の美術工芸品を一括購入した件について「アメリカに売却されることを知った福澤が私財をもって阻止したのであって、古文化財の海外流出防止への私的努力を示す行為」と、理解を示している。

### 3. 文化財保護は国の仕事

その福澤が明治11年ころから、古社寺や古美術の保存について熱心に主張し始めた。最初は同年5月、慶應義塾社中の意見発表の場である『民間雑誌』に発表した「国の装飾の事」と題する論説だ。『古社寺保存法』が制定される約20年前のことである。

まず明治政府が行った神仏分離、廃仏毀釈政策の非を指摘し「一国の装飾たる可き宮寺の風景を損じたるの実を見るは、嘆息に堪えざることなり」として日光、芝、上野の東照宮に論及している。

「日本に來遊したる外国人の話を聞けば十人は十人常に稱讚せざるはなし。殊に建築の學に志す者の如きは、日本の技術の巧なるに驚き、或いは世界無比と稱する者あるに至れり。古來我國固有の実物にして、山水の風景を除くの外、口を放て外人に誇る可きものは、特り比日光、芝の建築あるのみといふも可なり(略)唯其敗類に任じて雨露に腐朽す可きのみ…斯の如きは即ち日本國の爲に一個の装飾を失ひ、國の外見を損ずるのみならず恰も國人の懶怠を表するの證據たる可し。遺憾少なからざるなり」

芝と上野は徳川家の私廟、日光も國幣社だが実は徳川家の廟社で由緒ある霊場なのだから、徳川家が之を保存すべきだ—という意見に対しては「日本人民公共の建築であり、公共の力をもって保存するのも人民の責任」として次のように主張している。

「徳川家をして比廟社を維持せしめんといふは、名を維持にして其実は之を破壊するに異ならず、斧槌を以て家を破るも雨露を以て之を破るも、其これを破るの実は相同じ。(中略) 全国の装飾たる大廟社に於いてをや、費用なくしてこれを保存す可けんや。蓋し日本の人民は比廟社を恰も見殺しに摺る積もりならんか、無情殺風景の極といふ可し。實際其保存の仕組に至りては…其地方の地面山林等を給するか、若しくは単に全国人民に課するものとして、國税を以て給するも差支なかる可し」

古社寺や古美術など文化財の保護、保存は、本来国の仕事だ—という訴えである。この間廃仏毀釈をはじめとして古文化財の破壊はあまりにも甚だしかった。明治政府は明治4年『古器旧物保存法』を布告したものの、内容はきわめて不十分だった。

福澤は明治15年(1882)3月1日『時事新報』を創刊した(図3)。このかげには前年の「明治14年の政変」★<sup>2</sup>といわれる“官製クーデター”があった。藩閥政府の伊藤博文・井上馨 VS. 福澤諭吉・大隈重信という対立の図式があり、詳細は省くが大隈は下野した後の15年3月、立憲改進黨を組織、10月には早稲田大学の前身である東京専門学校を創設した。「片手に政党、片手に学校」(『早稲田大学百年史』)といわれるゆえんだ。大隈はのちに政界に返り咲き、爆弾テロで片足を失いながらも総理大臣に登りつめる。しかし福澤は終生在野を貫き、明治維新後の日本の近代化のために、新聞(時事新報)、出版(慶應義塾出版社★<sup>3</sup>)、演説(三田演説会★<sup>4</sup>)そして人間交際—異業種交流(交詢社★<sup>5</sup>)による啓蒙活動、社会教育運動に専念するのである。世に福澤の3大事業といわれるのは、近代私立学塾の慶應義塾、中立言論新聞としての時事新報、紳士社交クラブ・交詢社だが、いずれも近代国家建設途上のわが国にはじめて誕生したものである。そして福澤はその3事業に明確な旗を立てていた。慶應義塾の「独立自尊」はよく知られているが、時事新報は「独立不羈—不偏不党」、交詢社は「知識交換 世務諮詢」であり、それぞれの役割、理念を明らかにしている。余談だが、歴史小説家・故司馬遼太郎は著作『「明治」という国家』(日本放送出版協会)の中で、福澤についてこう記している。

「福澤は官途には仕えず、三田の山にいたまま、明治政府から無類の賢者として尊敬を受け、明治国家のいわば設計助言者としてあり続けた…勝海舟は建物の設計者、福澤は新国家に文明という普遍性の要素を入れ

る設計者であった」

#### 4. 「帝室論」で“皇室メセナ”すゝめ

福澤の藝術、文化に対する支援いわゆる“メセナ活動”を、こうした啓蒙運動、社会教育活動の視点からとらえると、その狙いや役割がよくわかる。時事新報を発刊した直後の福澤は主として主筆兼論説委員長に徹して、連日のように社説を執筆していた。まず、創刊後間もない4月26日から5月11日まで『帝室論』を計12回連載し、終了後すぐに単行本として出版した。冒頭に「帝室は政治社外のものなり」とあるように、帝室を政争の具にするのではなく政治の外にあって高く仰ぐ存在とすべき—とした。その役割として「学問教育の振興、日本固有の芸術の保護など、国民の福祉、文化事業の中核となって、国民統合の役割を果たすべきだ」と主張した。だがこの福澤の帝室の尊厳と安泰を願う真意は長い間理解されず、逆に帝室軽視などの批判を浴びた。昭和12年、慶應義塾の大学予科でこの『帝室論』を収録した『福澤文選』（富田正文・宮崎友愛共編）を学生の参考書に使用したところ、時の文部省から「不相当」と注意勧告され、再販の際に削除した事実があったという。しかし太平洋戦争後に生まれた現行憲法は、皇室を“政治社外のもの”として象徴天皇制をとっており、『帝室論』は一転して再評価されるようになって今日に至っている。平成20年5月30日、三田キャンパスで開催された福澤研究センター開設25周年記念講演会で、武蔵野大学学長で前福澤センター副所長の寺崎修は「福澤の近代化構想——天皇・議会・内閣・地方制度を中心に」と題して『帝室論』を取り上げこう語った。

「終戦後、新憲法が制定されると福澤の所論は現憲法下の象徴天皇制の精神に合致することから、一転して再評価されました。ですから今上天皇が皇太子だった当時、ご教育参与となった小泉信三（元慶應義塾長）はこの帝室論を教科書として使い、ご進講中は皇太子とかかわるがわる輪読したことが、今日伝えられているのです」

現代では当然とされる象徴天皇制を示唆する思想を、福澤は1世紀以上も前に提言していたのだから、その先見性には目を見張らざるを得ないと思うのだがどうだろう。

この『帝室論』に美術保存論と見られる言説がある。

「我輩の特に注目する所は日本固有の技藝にして、今日これを保存せんと欲すれば其事難からず、之を放却すれば遂に其痕を絶つ恐あるもの即是れなり。日本の技藝に書画あり、彫刻あり、劍槍術、馬術、弓術、柔術、相撲、水泳、諸礼式、音楽、能楽、囲碁、将棋、插花、茶の湯、薫香等、其他大工左官の術、盆栽植木屋の術、料理割烹の術…是等の諸藝術は日本固有の文明にして、今日の勢既に大なる震動に逢ふて次第に衰へんとするものなれば、之を其未だ滅了せざるに救ふ

は実に焦眉の急といふ可し」

「今この急を救ふの策果たして如何す可きや、之を今日の文部省に托す可らず…政府の官省が人事に不用なる藝術を支配して、之を保護奨励せんとするが如き全く想像外…唯此際に依頼して望むべきは帝室あるのみ。帝室は政治社会の外に立て、高尚なる學問の中心となり、兼て又諸藝術を保存して其の衰頹を救はせ給ふ可きものなり」

これは『民間雑誌』の「国の裝飾の事」にスタートした福澤の一連の“古社寺古美術保存論”（石河幹明著『福澤論吉傳』第4巻第40編第6章に「古社寺古美術保存論」あり）の中核をなすもので、同じような主旨の社説、論説がその後の時事新報などでさまざまに展開されている。全集から関連するタイトル、項目をざっと拾っただけでもかなりある。

〈時事新報社説〉

- 「古記古物保存す可し用ゆ可らず」（全集第10巻、明治17年11月28日）  
「社閣保護と富籤興行」（同 13巻、 24年6月11～12日）  
「京都の神社仏閣」（同 13巻、 25年5月13日）  
「神社仏閣の維持保存」（同 13巻、 25年9月14日）  
「富豪の要用」（同 13巻、 25年12月18日）  
「社寺の保存法等閑にす可らず」（同 15巻、 28年10月2日）  
「神社仏閣復活の時機」（同 15巻、 29年7月5日）  
「古物保存の要不要」（同 16巻、 30年7月16日）

〈福翁百話〉

- 「善心は美を愛するの情に出づ」（『福翁百話』第11話、同30年7月）  
「古物の真相」（同 第89話、同 ）

## 5. 「帝室は諸藝術を保護すべし」

『帝室論』については、元慶應義塾長代理で文部大臣を務めた故高橋誠一郎が、昭和天皇にご進講している。また今上天皇が皇太子時代、東宮御教育常時参与を務めた小泉信三が“帝王学”をご進講する中で、神田の古書店で購入してきた『帝室論』を殿下と交代で音読したことは先述した。天皇、皇后両陛下は平成20年5月、慶應義塾三田キャンパス・旧図書館で開催された「生誕120年記念 小泉信三展」をご覧になった際、小泉とともに学んだ『帝室論』と原書で読まれた『ジョージ5世伝』のコーナーを、特に熱心に見入られていたという。さらに両陛下は同年11月8日、日吉キャンパスで開催された慶應義塾創立150年記念式典に出席され、天皇陛下は福澤論吉について「開国した日本を支えるうえで重要な役割を果たした一人であり、著作を通じ、また慶應義塾の教育を通してわが国の人々に大きな影響を与えた」とお言葉を述べられた。天皇陛下の福澤に対する評価と理解は、『帝室論』で示唆した象徴天皇制の精神と無縁ではない——と私には思われるのである。

図1 書幅「國光發於美術」  
福澤諭吉筆

図2 書幅「購古銅佛」  
福澤諭吉筆 慶應義塾蔵  
(福澤は時折漢詩の字句の一部を変えて書いている)

図3 『時事新報』創刊号  
明治15年(1882)3月1日  
慶應義塾図書館蔵

図4 書幅「戲去戲来自有眞」  
福澤諭吉筆 慶應義塾蔵

図 5-1 9代目団十郎

図 5-2 5代目菊五郎

図 5-3 初代左団次

図 5 団菊左胸像 国立劇場蔵（著者撮影）

図6 錦絵「尾上菊五郎／風船乗スベンサー」《風船乗評判高閣》  
国立劇場蔵

皇室による美術、藝術の保護、保存という点では、宮内庁管轄の正倉院とその御物がまさにそれであり、東京・大手町の三の丸尚蔵館も皇室のメセナの展示場といってよい。

こうした福澤の文化財保護に対する考えについて、高橋は昭和37年、「福澤論吉と文化財保護」と題する論文を美術雑誌『大和文華』（奈良・大和文華館刊）に発表している。高橋は福澤の「国の装飾の事」をはじめとする一連の古社寺、古美術の保護、保存論を改めて確認したうえで、『帝室論』における福澤の主張を高く評価したのである。

「まさに、明治23年に制定された帝室技芸員制度や、現行『文化財保護法』による重要無形文化財の国家指定、その最高度の体現者をこれが保持者として認定するいわゆる「人間国宝」の制度を予示するものといえよう。ただ先生は…政府の官省が目下の人事に不用な藝術を支配して、とくにこれを保護奨励しようとするがごときは、全く想像外の事と見られたのである。そこで先生は、この際依頼すべきはただ、帝室のみであると考えられた。先生をもって見れば、帝室は政治社会の塵埃の外に高く立って、高尚な学問の中心となり、かねてまた、諸藝術を保護して、その衰頹を救うべきである」

その後の日清戦争を転機に国力が増進するとともに、古社寺、古美術の保護、保存への国民的関心は高まり、明治30年『古社寺保存法』が制定された。44年には『史蹟名勝天然記念物保存法』が議会で提出され、大正8年（1919）に公布、施行された。さらに昭和4年の『国宝保存法』、同8年の『重要美術品等の保存に関する法律』が、太平洋戦争後の昭和25年5月、『文化財保護法』に生まれ変わったのである。この年8月、高橋は日本藝術院長、国立博物館長から文化財保護委員会委員長に就任し、福澤の「国の装飾の事」や『帝室論』などで提言された文化財、美術品の保護、保存の行政に専念していった。

高橋は論文「福澤論吉と文化財保護」の後半で、本論の冒頭で紹介した福澤の書「國光發於美術」を引きながら「明治30年の頃になると、重商主義的貿易均衡論者的見地から、とくに外国観光客の吸引、外貨獲得に重点を置いて古社寺、古美術の保存を主張されたのである」と指摘している。福澤の時事新報における外国観光客誘致の論点はこうだ。

「日本は山水明媚、愛す可きのみならず、其国中には幾百年前の古社寺、古物、世界各国他に見る能はざるものを存して、随意に見物するを得べしといえは…外遊とあれば我国に志すこととなり、自ずから客足を引くに至るべし。例えば、年々の来客1万人の処に古物見物の為に5千人を増して、1人にて千円を散ずるものとすれば、5百万円の金は余計にわが国に落つるものなり。（中略）果たしてこの趣向な

らんには、1年20万円は甚だ少なし。更に百万円なり、2百万円なり支出して、大いに保存の実を謀る可し」

現代では常識的な外国人観光客誘致の基本的な考えを、福澤は1世紀以上前に提唱していたといつてよいであろう。この「観光」は中国古典の『易経』にある「観国之光利用資于王」に由来するといわれる。他国の光、つまり文物、制度や風俗、習慣などを見て、自国の政治や文化の参考にするといった意味で、のちに転じて「観国之光」略して「観光」になったとされている。

『福澤手帖』の70号で「福澤論吉の美術観——メセナへの先見性」を報告した故衛藤駿は、福澤の書幅「國光發於美術」の出典は『易経』のこの語句にあると見ている。衛藤は福澤の語句について「観光の目的がみずからの眼で未知の世界を確かめ、自己の向上に資するものであれば、美術こそが観光第一の眼目であることを痛感した結果「國光發於美術」に思い至ったにちがいない」としている。そして福澤のメセナについて、次のように結論をまとめたのである。

「福澤のいう「國光」とは、一国の品格といったものを指示しているように思われる…人間にたとえればまさに「気品の泉源」に相当することになるだろう。それが美術品の中に結実しているとしたところに、福澤の炯眼がうかがえる(中略)今日、メセナあるいはフィランスロピイという社会への「文化貢献」なるものが世上に喧伝されているが、一国の文化、就中美術が果しうる役割を「國光發於美術」とした福澤の先見性は高く評価されてしかるべきであり、その今日的意義とその考え方の拠って来たるところについて再認識する絶好の機会と思われるのである」

## 6. 中年から熱を入れた「漢詩」と「芝居」

福澤は自ら「無趣味、殺風景」と称し「無芸無能、書画、骨董一切無頓着」(『福翁自伝』)といていたが、中年以降熱を入れたものが二つある。明治11年、44歳で始めた漢詩作りと、20年3月、53歳の時に初めて観た芝居である。福澤は11年10月19日付けの『詩集序』に「25年間漢書にふれたこともなかった。偶然(入門書の)『詩韻含英』を買って作ってみたらだいたい覚えていたので、老後の楽しみとして作品を記録しておく」と書いて、以後64歳まで漢詩を作り続けた。その数は全集第20巻に収録されているものだけで136首にのぼる。明治の文豪、森鷗外の232首、夏目漱石が残した194首には及ばないが相当な量である。周知のように漢詩の形式には五言絶句、七言律詩、古詩などがあるが、福澤の漢詩は大半の122首が初心者に多い七言絶句だ。また漢詩の作法に韻を踏むことや“四声平仄”(中国語の音節変化の区分)などの約束事があるが、専門家が見る

と韻事、平仄の誤りが時折見られたという。福澤は頼まれて自作を揮毫して贈ることが多かったが、「戯れに」などの言葉を添えており趣味道楽の範囲を自覚していたと思われる。福澤は慶應義塾の「独立自尊」のように、この本質を象徴したキーワードを作るのが巧みだったが、私は漢詩における福澤のキーワードは「戯」ではなかったかと思う。

戯去戯来あるいは戯来戯去など、「戯」を書いた書幅や漢詩はいくつもある。多くの慶應義塾関係者が一度は見たことのあるのが、「戯去戯来自有真」（戯れ去り戯れ来る 自ずから真あり）の半切（図4）だろう。明治27年の元旦には次の漢詩を書初めとした。

甲午元旦試毫	きのえうま（明治27年）の元旦毫（ふで）を試む
戯来戯去又迎年	戯れ来たり戯れ去り又年を迎う
萬事不求祝瓦全	萬事求めず瓦全（安全に身を終える）を祝す
子女今朝試毫処	子女今朝毫を試むるの処
乃翁亦誇墨痕鮮	乃翁も亦誇る墨痕の鮮やかなるを

（人生は本来戯れに過ぎないと悟り、戯れ半分に毎日毎日を送り迎えしているうちに、また新年を迎えることになった。わたしはいっさいの欲をなくして、ただその日その日をつつがなく過ごすことを心掛けるだけである。子どもたちが書き初めをするというので、わたしもそのなかま入りをして、どうだ、よく書けたろうと自慢をしているところである）＝読み下しと訳文は故富田正文著『福澤論吉の漢詩35講』（福澤論吉協会）より。

「戯去戯来」は福澤最晩年の円熟した心境を披瀝した『福翁百話』の第7話「人間の安心」に説き尽くされている。大要は、人生は本来戯れに過ぎないと大観しつつ、一場の戯れを戯れで終わらせずに、まじめに勤めよう一というのである。

## 7. 団十郎に歌舞伎脚本執筆、菊五郎に英語指導

福澤は明治20年（1887）3月21日、54歳の時に家人と初めて新富座で歌舞伎を見物した。初代市川左団次の『正直清兵衛』で、次の漢詩を即吟している。

明治二十年初観演劇	明治二十年初めて演劇を見る
誰道名優伎絶倫	誰か道（い）う名優の伎は絶倫なりと
先生遊戯事尤新	先生の遊戯事ははなはだ新なり
春風五十獨醒客	春風五十独り醒めるの客
却作梨園一醉人	却って梨園の一醉人となる

（名優の演技はほかに比べるものがないというが、わたしの生涯に演じて来た演技などはもっとも斬新なものである。今日まで五十年、一世の民衆が酔生夢死している間に、ひとり目ざめて警鐘を鳴らし続けていたつもりのわたしが、いま劇場に入って舞台上の演劇に酔って喜憂する身となるとはおかしなことである）＝読み下しと訳は富田正文著『福澤論吉の漢詩 35 講』による。

この時は明治の名優といわれた9代目市川團十郎、5代目尾上菊五郎も『太田道灌』『辰駕』などに出演しており、これをきっかけに福澤は団菊左(図5)の3名優と親しく交流するようになった。富田が解説の後に「その後先生の演劇への関心は次第に高まり、俳優たちとの交際も親密の度を増し、明治21年には主役を団十郎に擬した芝居の筋書き『四方の暗雲波間の春雨』<sup>はるさめ</sup>を書き下ろした」と書いている。

この脚本は全集第20巻に11頁にわたって収められている。ゼルマニア皇室の皇女とポーランド国貴公子の恋物語を発端に、英、仏、露諸国の国際情勢をからませ国際スパイが暗躍するなどスリルとサスペンスに満ちた壮大なストーリーで、全編10幕の大脚本だった。主役のビスマルクに団十郎、女王は福助一などと新聞にも載ったが、結局は上演されず“幻の国際歌舞伎脚本”に終わっている。

もう一つ福澤が歌舞伎舞台のプロデュースをした話がある。こちらの役者は菊五郎だ。平成20年10月～年末まで、千代田区隼町の国立演芸場で「演芸資料展 ― 見世物を中心に」展が開催された。江戸から明治の見世物興行を錦絵やピラで紹介したミニ展覧会で、メインの作品は歌舞伎の3枚組みの錦絵「風船乗評判高閣」<sup>ふうせんのかうむさのたかどの</sup>(図6)。左隻で風船乗りが空中からピラをまき、下から歌舞伎役者が見上げている。この錦絵の元となった芝居、河竹黙阿弥作の浄瑠璃3部作「風船乗評判高閣」が明治24年1月、歌舞伎座で上演された。錦絵に詳しい日本女子大附属高校教諭、日朝秀吉が平成13年12月号の『福澤手帖』111号(福澤論吉協会)に「音羽屋の『風船乗評判高閣』」と題して、このいきさつを詳述している。

日朝によると明治23年秋、直径約8・5尺の大気球を使った英国人スペンサーによる風船乗りが横浜公園で行われ、大勢の観客でにぎわった。空中からまかれたピラは『時事新報』の広告で、「これを本社へ届ければ時事新報を1箇月分進呈致すべし」という読者サービス用のPRチラシだった。これを見ていたのが西洋の事物を積極的に歌舞伎に取り入れていた菊五郎で、河竹黙阿弥が前年に完成したばかりの浅草・凌雲閣(いわゆる「十二階」)もとり入れて、浄瑠璃3部作「風船乗評判高閣」(岩波書店『新日本古典文学大系明治編8河竹黙阿弥集』収録)として書き下ろしたという。翌24年1月、歌舞伎座の初芝居で上演され菊五郎扮する風船乗り・スペンサーが英語で挨拶して人気を呼んだ。(財)松竹大谷図書館の『歌舞伎座年表』明治24年の項には「スペンサーに扮して熱演した菊五郎は劇中

“三田の福澤先生”が書いたという英語の演説を“レディース・エンド・ジェントルメン”とやって大入りの観客をわかせた」と記されている。この英語の演説の仕掛け人が実は福澤で、同年1月14日付けで次男、捨次郎に宛てた書簡にこう書いている。

「尾上菊五郎が歌舞伎座にて風船的一幕を催すとて色々問合わせに参り…菊五郎にほんとうの英語にてスペンサーの如くしては如何との言に、菊五郎も是非やって見たしとて…」

菊五郎の英語の師匠は“秀さん”こと今泉秀太郎。福澤の甥で、アメリカ留学して「カリカチュア（戯画）」を学び、帰国後時事新報の漫画記者となった「時事漫画」の創始者、今泉一瓢だ。手紙は菊五郎について「英語も相応に出来候よし」としたうえで「秀さんは毎日のやうに楽屋に入込み、英語教授その外の指図に忙しく致居候」と活躍ぶりを紹介している。菊五郎のスペンサーは軽気球に乗った時と英語の挨拶をしたあとの2回、舞台上から時事新報や広告代理店がスポンサーした歯磨きのPRチラシを客席にまき、広告宣伝に一役買ったという。日朝は「福澤のアイデアを河竹黙阿弥が脚色し、それを尾上菊五郎が1人3役をこなして、見事なまでに演じ切る。新聞・広告・軽気球・公園・博物館・塔…など19世紀末の東京を象徴するような事物が次々と登場して、観客の目と耳と心をとらえて離さない。ここに私たちは、横浜公園から歌舞伎座に至る一連の興業の仕掛人、“ゼネラルプロデューサー・福澤”の顔を見ることができると語っている。

福澤は時事新報紙上で「芝居論」（明治19年11月3日付）、「演劇演藝の改良」（20年6月9日付）、「芝居改良の説」（10月9日～15日、4回）などを展開して演劇のサポートをしている。さらに22年3月30日付で「市川團十郎」、33年10月19日には「團菊のあとに團菊なきか」という異例の社説を発表して、それぞれ評価、支援をしたのである。ことに自分と同世代でともに老境に入った2人の名優をいたわり、その後の歌舞伎衰退を心配する團菊論は、福澤が長逝する半年前の論説で私信のような内容であった。

## 8. 福澤家の家庭音楽会

最後に福澤家の音楽会を報告する。平成10年、慶應義塾機関誌『三田評論』の創刊100年記念に出版された『ふだん着の福澤論吉』（西川俊作・西澤直子編）に「ウィグモア博士の日本だより」という章があり「福澤家の晩餐会」が紹介されている。アメリカ・ノースウェスタン大学のウィグモア博士が明治22年に法学部教授として招聘された際、福澤論吉にもてなされたことなどを書いて家族に送った手紙が保存されていた。約50年後の昭和14年、ウィグモア博士の遺族が手紙の写しを福澤の孫にあたる

三女、俊の長男、故清岡暎一（元慶應義塾幼稚舎主任）に届け、それを清岡が翻訳して同年9月号の『三田評論』に掲載したものである。

明治23年1月23日付けの書簡は、ウィグモア夫人によるもので「さあ、これから福澤家の晩餐会に就いて申し上げます」とその模様が活写されている（要旨）。

「洋間に案内され家族に紹介されました。福澤氏夫妻、長男一太郎氏、房子さんと令婿桃介氏、中村氏夫妻と3人のお嬢さん…全部で14人の御家族が居られました。塾の偉い役員方を含め皆で凡そ30人くらいです。福澤氏は親愛に満ちた顔の大きな人です。英語を話すときつかえませんが聞く事はよくお判りになります。4人のお嬢さんは非常に美しく、良いアクセントで英語をお話になります…福澤氏夫妻や華麗、優美な着物を着たお嬢さん方がひざまずいてお給仕しているのを見ると、アラビアンナイトのようでした…（食後）舞台のあるながい室にきました、お伽の国に来たようでした。3人のお嬢さんが琴をお弾きになりました。次に東京一の男の人の三味線と女の人の唄を聞きました。何より美しかったのは4人のお嬢さんの踊りです。私どもはすっかり恍惚としてしまいました…私はこれ以上美しい家庭の光景は、世界中を探しても見られないと信じます」

福澤は『自伝』の「始めて東京の芝居を見る」と述べた章で「実は鳴り物ははなはだ好きで、女の子には娘にも孫にも琴三味線をはじめ、また運動半分に踊りの稽古もさせて老余唯一の楽しみにしております」と告白している。

さらに平成6年12月の『福澤手帖』83号では、当時慶應義塾高校教諭の佐志伝さしつたえが「福澤諭吉、その芸能的環境」と題した小論で「福澤家は琴三味線尺八三曲界の大後援者だった」としている。佐志は昭和33年に刊行された『松韻芸話』（藤田俊一著、日本音楽社）から次の記述を引用している。ちなみに福澤の長女、里が明治8年に琴を習っていたときの師匠が馬場美勢、一緒に通っていた兄弟子が萩岡松韻（初代）で、のちに里ら娘たちの師匠となった。松韻は福澤家の模様をこう記した。

「福沢先生の家庭では奥様始めお嬢さん方が三味線やお箏が熱心であるし、御子息は尺八をされるし、それに先生が「音楽として箏三味線をやれ」と言われるので、その上自分でも六段を少しやったから聞いて呉れとって、初めのころはよく弾いておられた位ですから、熱心な三曲党の御家庭でした」

これには佐志も「福沢が明治10年前後にみづから箏曲の「六段」を弾いたというのはまったく意外な発見である」と驚いている。『松韻芸話』

の著者によると当時は、文明開化の世相を受けて西欧の文物がもてはやされ、旧来の日本の伝統文化は衰退して一流の師匠でさえも生活困難に陥り、箏曲はすたれて習うものも少なかった時代であった—という。

そのような時だけに、萩岡松韻は「福沢先生のお宅で（三曲の家庭音楽会が）やられる位だから、之はキット廃るものではない、之から盛んになるのだと云はれるようになりました」語っていたというのである。佐志は“福澤家の家庭音楽会”について、さまざまなエピソードを含めて詳述したうえで、次のようにまとめている。

「福澤諭吉という人物が四角四面の思想家とか教育者という枠から大きく踏み出して、琴や三味線を聴くのを好み、娘や孫たちの稽古事の発表会はもとより、三田山上の住人や時事新報の社員までもまきこんだ家庭音楽会をしばしば開いて、人の集まりのなごやかさを“老余の楽しみ”にする一好々爺の一面がクローズアップされてきたと思う」

余談だが平成21年1月10日（土）から3月8日（日）まで、東京国立博物館で開催された慶應義塾創立150年記念『未来をひらく福澤諭吉展』（5月福岡市立美術館、8月大阪市立美術館巡回）の第2部「語り合う人間<sup>じんかん</sup>」の中で、この福澤家家庭音楽会の案内状と“素人音楽番組”と題したプログラムが紹介されている。

こうしてみると福澤は文化藝術の支援いわゆるメセナ活動を、時事新報をはじめとするさまざまなメディアや機会を通じて呼びかけ、実践してきたことがわかる。また個人として家庭人としても書作、漢詩を好み、歌舞音曲を愛し、時に自ら脚本を書き演出にたずさわり、琴を弾いたことまでであるという。“老余の楽しみ”とはいえ福澤個人のこうした側面は、これまであまり知られてなかったことであろう。「無趣味、殺風景」と自称した福澤だが、晩年のよき家庭人を含めたトータルの間人像は、実は藝術文化の分野においても、広い理解と深い見識をもった多面的な巨人であったことを、改めて報告するしだいである。

## 註

☆1 — 木強漢＝心が木石のように一徹な男の人。無骨な男。

☆2 — 明治14年の政変＝明治14年（1881）初め、福澤諭吉は明治政府の執政、大隈重信、伊藤博文、井上馨の3参議から「政府公報のような新聞をつくってほしい」と頼まれ準備していた。同年10月、3参議は国会開設など立憲政体の導入に対して、大隈 VS 伊藤博文・井上馨の形で意見が対立、不仲となった。おりから北海道開拓使官有物払下げをめぐる不正疑惑事件が表面化し、大隈が下野、その一派が追放された“官製クーデター”の政変をさす。福澤は大隈と組んで薩長藩閥政府の転覆を図っている—などの噂が流布され、福澤門下の若手官僚だった矢野文雄（のち郵便報知新聞社長）、中上川彦次郎（同時事新報社長）、犬

養毅（同総理大臣）らも追放された。福澤は準備していた政府広報用のヒト、カネ、モノで、翌15年3月1日、時事新報を創設した。このため「時事新報は明治14年の政変の産物」（故小泉信三元塾長）といわれる。

☆3 — 慶應義塾出版社＝明治2年（1869）、福澤は『福澤屋論吉』の屋号で東京書物仲間問屋組合に登録、自らの著訳書などの出版事業をはじめた。『西洋事情』（同年）を皮切りに『学問のすすめ』（5年）、『文明論之概略』（8年）などを次々と出版して、いずれもベストセラーになった。わが国初のユニバーシティプレスであり、当時最大規模の出版社に発展した。事業の拡大に伴い5年に慶應義塾出版局、7年に慶應義塾出版社と改称、15年に時事新報を発刊し17年に時事新報社となった。

☆4 — 三田演説会＝明治7年（1874）、福澤を中心に演説と討論の方法の開拓と実践のために作られた啓蒙活動組織。このグループで「スピーチェ」を「演説」、「ディベート」を「討論」と訳し、演説、弁論発展の基礎を築いた。翌8年、現存する三田演説館（重要文化財）を建設、今日まで約700回にのぼる演説会が開催されている。

☆5 — 交詢社＝明治13年（1880）1月、福澤諭吉、小幡篤次郎らによって創設された人間交際、異業種交流の共同結社。「知識交換 世務諮詢」を目的とすることから交詢社と名付けられた。わが国最古の紳士社交クラブであり、女性社員はいない。創設時から本部は東京銀座にあり、平成16年現在の新社屋（交詢ビルディング）に建て替えられた。

（すずき たかとし・慶應義塾大学大学院アートマネジメント分野講師、  
産経新聞社顧問／美術館・博物館経営管理及び企画運営）